

各地の音楽活動

北海道

八木幸三

札幌交響楽団（札幌）は今年創立60周年を迎えたが、海外からの出演者や曲目が変更されるなど、コロナ禍での影響は大きかった。そんな中、60周年を記念して公式ホームページに特別コーナーが開設され、全楽団員からのメッセージや、楽員が描いた歴代指揮者のイラストなどが掲載された。また、札幌の歴史的音源のCDなどを札幌市のふるさと納税の返礼品にするなど、ファン拡大を図っている。昨年からは始められた札幌文化芸術劇場（hitaru）を会場とする新・定期演奏会と合わせ、定演は今年13回おこなわれた。また、札幌コンサートホールが改修工事だったため、hitaruでの演奏はさらに増えた。

1月定期は首席指揮者マティアス・バーメルトの来札が叶わず、代わって大植英次が、ブルックナー／交響曲第8番を巨大建造物を俯瞰からとらえるように均整のとれた構成美で音化させた。定演でのゲストは多彩な国内アーティストが顔を揃えた。2月に逝去した尾高悼忠の「チェロ協奏曲」を宮田大の独奏で世界初演（3月）。宮田の深みのある音色と実弟の尾高忠明の伶俐なタクト、札幌の精緻なアンサンブルから作曲者への追悼の意が伝わった。小菅優がバルトーク／ピアノ協奏曲第3番を印象派音楽のような響きで佳演（4月）。神尾真由子がグラズノフ／ヴァイオリン協奏曲をいぶし銀のような音色で聴かせ（5月）、小曾根真がラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番で、洗練された彼独自のカデンツァにより聴き手をロマンと幻想の世界へと誘った（7月）。25歳の松本宗利音が、早坂文雄の「左方の舞と右方の舞」などを指揮（1月）。来年より正指揮者となる川瀬賢太郎と人気若手ピアニスト藤田真央がシューマン／ピアノ協奏曲で共演（6月）。二人の若手指揮者が札幌に爽やかな風をおくった。札幌はこれまでに武満徹作品を積極的に取り上げているが、友情客演指揮者広上淳一が「弦楽のためのレクイエム」（5月）をはじめ、尾高が「海へⅡ」を演奏（6月）。この曲は札幌が初演しているが、その音源によるCD「1982武満徹世界初演曲集」がドイツ・グラモフォンから世界同時発売され話題となった。さらに尾高は「3つの映画音楽」で武満の劇伴音楽の魅力も伝えている（7月）。また、井上道義が「グリーン」と「鳥は星形の庭に降りる」を幻想的な響きで幽玄に奏でていた（10月）。そして、万全の感染予防対策を施し1年半ぶりにバーメルトが登場。実にエレガントで風格のあるブルックナー／交響曲第7番を聴かせた（9月）。

昨年、コロナ禍で中止された世界的教育音楽祭パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）は、2年ぶりに海外の教授陣によるオンラインでの指導や日本在住アーティストとPMF修了生、さらにアカデミー生などによるコンサートなど、感染対策を施しての開催となった。しかし、開幕から約1週間後に関係者から新型コロナウイルスの陽性者が出て、会期後半の日程は全て中止となった。前半は教育プログラムとしての新しい試みである「第1回PMFクラシックLABOオーケストラのみみつ」をはじめいくつかの充実したコンサートを聴くことができた。まず、今年のPMFオーケストラは、この30年間に輩出されたPMF修了生で、現在国内オケで活躍する40人と今年のアカデミー生26人と総勢75人からなる特別編成となった。原田慶太楼の指揮は、PMF創設者バーンスタインの「キャンディード」序曲をはじめ、コープランドやガーシュウィン作品をキレのあるフレーズ感で仕上げている。PMFのホストシティ・オーケストラとなる札幌は、PMF30年の歴史を経て11人のPMF修了生が団員として在籍している。期間中の演奏会では、創成期の

PMFを支えた大植英次が29年ぶりに登場。ベートーヴェン／交響曲第4番やバーンスタインがPMFで演奏したシューマン／交響曲第2番を斬新な音楽作りで創出させた。オープニング・コンサートにも登場したピアニスト三船優子が、バーバーやヒナステラ作品などでパワフルなリサイタルをおこない、同コンサートのコンサートマスターを務めた郷古廉がロマン派の作曲家に焦点を当てたりリサイタルで、ピアノの津田裕也と共にR・シュトラウスやブラームスのソナタを情熱に溢れたボーイングで快演した。

道内オペラ界は、2月に北海道二期会がhitaruとの共催により「蝶々夫人」を上演。主役の佐々木アンリは、ドラマティコに近い堂々とした歌唱を聴かせ、岡崎正治（ピンカートン）との幻想的な二重唱も印象的。8月には、原作・台本：原子修、作曲：八木幸三（筆者）による地元発信の本格的オペラ「～よみがえる縄文の鼓動～ノンノ」を公演。このオペラは札幌オペラ団体が集結し、札幌市教育文化会館との共催、オール北海道によるキャスト、合唱、バレエ、管弦楽、スタッフにより世界初演された。公演直前には、東北・北海道の縄文遺跡が世界遺産登録され大きな話題となり、主役の倉岡陽都美は今年度の道銀芸術文化奨励賞を受賞した。また、1月には台本・演出：塚田康弘、作曲：二橋潤一、二重奏によるマドリガーレ・オペラ「箱館戦争」三部作が札幌市民交流プラザで映像と対談により3日連続公演をおこない、北海道オリジナルオペラの存在感を披露した。

コロナ禍で公演を見合わせていたアーティストが、感染状況が下火になりはじめた下半期から次々と演奏活動を再開。声楽では陣内麻友美が古楽器奏者濱田芳通などと共にイソップ物語の由来を辿ったステージや北海道と沖縄で語りつがれる歌曲を素材とした公演などユニークな企画で注目を集めた。谷地聡子は日本歌曲をはじめ、仏、伊、米国のオペラアリアなど多彩な曲目で、根深夏はルネサンスからバロック初期のオペラアリアなどによるリサイタルをおこなった。高橋節子が「シューマンと世紀末ウィーンの歌曲」と題してドイツ歌曲の魅力を伝え、平野則子は、浅井智子のピアノ、三瓶佳紀のクラリネットと共に木下牧子『蜘蛛の糸』を迫力のある歌と語りで演じ印象に残った。ピアノでは新堀聡子がオール・ブラームス、ベテラン岡本孝慈がベートーヴェンやブラームス、黒山映がハイドンのソナタなどでそれぞれ円熟した演奏を聴かせ、徳田貴子はガーシュウィンなどアメリカ作品を含めたりリサイタルで個性あるピアノを披露。器楽では新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズSAPPROで小山日女がフルートの名曲を、福井遥香が古典派から現代に至る多彩なクラリネット作品を聴かせた。フルートの阿部博光は音楽家の妻子と共にオールJ.S.バッハで道教育大退官記念演奏会をおこない、年末には無伴奏によるテレマン「12の幻想曲」を全曲演奏した。室内楽では、福井岳雄（Vn.）、中川恵美（Vc.）、辻千絵（Pf.）によるトリオが6月と11月に賛助出演者を含めブラームスのピアノ四重奏、五重奏曲を連続演奏。文屋治実（Vc.）を中心とするピアノ三重奏団は、ブラームスの三重奏曲で典雅な響きを創り出した。鎌田泉（Vn.）、石川祐丈（Vc.）、西本夏生（Pf.）によるピアノ三重奏では、西本と交流を持つスペインの作曲家P・ヒメノの作品を世界初演。山田慶一のチェロ・リサイタルでは、ベルギーの作曲家A・ビアランの「ピアノとチェロのためのソナタ」と「ピアノ五重奏曲」を日本初演した。ピアニスト影山裕子を中心とする日本シューマン協会札幌支部は、「ヴィオラで綴る詩とメルヘン」、「第5回シューマンアデー」さらに「詩と音楽」の3つの公演で、シューマンのみならず、ベートーヴェン、シューベルトの歌曲や器楽曲など趣向を凝らしたステージを展開。北海道作曲家協会は、昨年より延期されていた「第7回北海道の作曲家展」で、会員による8作品、一般公募1作品さらに韓国交流作品の10曲をレベルの高い演奏で発表した。